2018 年 10 月 31 日

SUPER FORMULA　レースレポート

2018　SUPER FORMULA シリーズ最終戦

山本、ポールトゥウインで逆転チャンピオン獲得

シリーズ名：2018 全日本スーパーフォーミュラ選手権 シリーズ第 7 戦
大会名：第 17 回 JAF 鈴鹿グランプリ
距離：5.807km×43 周（249.701km）
予選：10 月 27 日（土）晴れ・観衆:23,000 人（主催者発表）
決勝：10 月 28 日（日）晴れ・観衆:13,000 人（主催者発表）

2018 年度全日本スーパーフォーミュラ選手権シリーズ最終戦（第 7 戦）が、三重県鈴鹿サーキットで開催された。今回のレースは、第 17 回 JAF 鈴鹿グランプリと冠され、FIA 世界ツーリングカーカップ（WTCR）と併催となる。シリーズ最終戦は、優勝者にボーナスポイントとしてシリーズポイントが 13 点付与される。TEAM MUGEN は、#16　山本尚貴、#15 福住仁嶺の 2 カー体制でこのレースへ参戦した。シリーズポイントランキング 3 番手につける#16 山本にとってはシリーズチャンピオン決定戦である。

● 10 月 27 日（土）

■フリー走行

#16 山本　（ベストタイム 1 分 48 秒 009　7 番手）
#15 福住　（ベストタイム 1 分 48 秒 587　9 番手）

夜、本降りの雨がコースを濡らしたが朝にはいったん止んだ。しかし 8 時を前に再び雨がぱらぱらと降り出しコースは乾かない。WET 宣言が出てフリー走行は 8 時 55 分から 9 時 45 分の 50 分間に変更され、さらにコースオープンは遅れた。午前 9 時から 50 分の予定でセッションが始まった。雨は止んでいるがコースはウェットである。全員がレインタイヤを装着してコースインするが走ると水しぶきが立つ状況である。

コースはセッション終盤、ラインがわずかに乾きだし、一部マシンはドライソフトタイヤを装着して走行したが TEAM MUGEN の 2 台はレインタイヤのままセッションを終えた。

■公式予選

#16 山本 1 位（Q1：1 位　1 分 38 秒 477　Q2：1 位　1 分 38 秒 008　Q3：1 位　1 分 37 秒 909）
#15 福住 13 位（Q1：9 位　1 分 39 秒 082　Q2：13 位　1 分 38 秒 888　Q3：出走せず）

午後 12 時 35 分からの公式予選を前に鈴鹿サーキットは快晴となった。20 分間の Q1 セッションでは規則でミディアム・タイヤの使用が義務づけられている。#16 山本はコースオープンと同時にコースインし、タイヤのウォームアップをするとタイムアタックにかかった。セクター1～セクター2 までベストタイムを記録しラップタイム 1 分 38 秒 477 をたたきだしトップに立った。

一方#15 福住は 2 周かけてウォームアップをすると 1 分 40 秒 157 を記録、4 番手につけた。このときピットロードで火災が発生したため赤旗が提示されセッションは中断となった。

消火作業と路面のオイル処理を終えセッションは午後 12 時 55 分、残り 14 分 05 秒で再開された。#16 山本、#15 福住はピットで待機、他車の動向を見守る。残り 6 分となったとき 2 台は相次いでコースインした。その後#16 山本のタイムを更新する選手はおらず、#15 福住は再度タイムアタックをかけて 1 分 39 秒 082 を記録してセッションを終えた。#16 山本はトップ、#15 福住は 9 番手で Q2 進出を決めた。

7 分間の Q2 セッションは 15 分後れの午後 1 時 20 分から始まった。コースオープン後も#16 山本、#15 福住はソフト・タイヤを装着した状態で待機、セッションが残り 3 分 20 秒となったところでコースインした。#16 山本は 1 周でウォームアップをするとタイムアタックに入り 1 分 38 秒 008 を記録してトップに立った。#15 福住は 1 分 38 秒 888 でこの時点で 8 番手につけた。#16 山本のタイムを更新する選手は出ず、#16 山本はトップのまま Q3 進出を決めた。しかし#15 福住は 13 番手に終わり、Q3 進出はならなかった。

7 分間の Q3 セッションは午後 1 時 37 分から始まった。ソフト・タイヤを装着した#16 山本はコースオープン後、他車が続々とコースインする中ソフト・タイヤを装着して待機、Q2 出走 9 台中 7 番目にコースイン、ウォームアップにかかった。1 周のウォームアップの後タイムアタックに入った#16 山本はセクター1 からセクター2 まですべてのセクターでベストタイムを記録、1 分 37 秒 909 を記録してトップに立った。セッションはそのまま終了、#16 山本はポールポジションを獲得した。#16 山本はポールポジションポイントを加算、この時点でシリーズポイントランキングを同点 2 番手とした。#16 山本にとっては通算 10 回目のポールポジションであった。

● 10 月 28 日（日）

■フリー走行

#16 山本 （ベストタイム 1 分 41 秒 203　4 番手）
#15 福住 （ベストタイム 1 分 42 秒 239　17 番手）

快晴の空の下、午前 8 時 45 分から 30 分間にわたってフリー走行が行われた。#15 福住はソフト・タイヤ、#16 山本はミディアム・タイヤを装着してコースイン、走行を始めた。途中、タイヤのスペックを交換する選手もいた中、#15 福住、#16 山本とも当初のタイヤのまま走行を続行した。赤旗中断を挟み、#16 山本は 12 周を走行して 4 番手、#15 福住は 8 周を走行して 17 番手でフリー走行を終えた。

■決勝
#16　山本 1 位（43 周 1 時間 14 分 40 秒 652　ベストラップ 1 分 42 秒 042）
#15　福住 12 位（43 周 1 時間 15 分 45 秒 962　ベストラップ 1 分 42 秒 988）

決勝レースを前に 8 分間のウォームアップ走行が行われた。#16 山本はコースインとピットインを繰り返しスタートで用いるソフト・タイヤの感触の確認とミディアム・タイヤへ熱入れを行った。チームはスタートで使うソフト・タイヤの消耗を抑えるためセッティングをわずかにローダウンフォース側へ変更、レースに備えた。#15 福住はスタートに用いるソフト・タイヤの感触確認を 4 周にわたって行った。

日曜日は晴天となり気温 21℃、路面温度は 23℃と上昇した。午後 2 時 15 分、決勝レースが始まった。ポールポジションの#16 山本、13 番手スタートの#15 福住ともにソフト・タイヤでスタートした。スタート合図の瞬間、#16 山本は好加速、2 番手を押さえて先頭で第 1 コーナーへ進入した。

#16 山本は 1 周目に 1 秒 379、2 周目に 1 秒 863、3 周目に 2 秒 306 と周回毎に後続を引き離していった。ポイントランキングを逆転してシリーズチャンピオンになるためには、#3 ニック・キャシディ選手を押さえ込んで優勝する必要がある。#3 キャシディ選手はミディアム・タイヤでスタート、4 番手でレースを始めてレース後半でソフト・タイヤを使い追い上げる、#16 山本とは逆の作戦を選んでいた。#3 キャシディ選手を押さえ込むためにはレース前半のうちに間隔を拡げておかねばならない。#16 山本はひとり 1 分 42 秒台のタイムを連発して 2 番手以降を引き離していった。

一方#15 福住はスタートで一気に順位を 9 番手に上げ 12 周目にピットインしミディアム・タイヤへの交換を行って 14 番手でレースに復帰した。しかしペースを上げて追い上げにかかろうとした 20 周目、ダンロップコーナーでオーバースピードからハーフスピンを喫し、14 番手のポジションのままコースに復帰することはできたものの、大幅なロスタイムを強いられて前走車からは引き離されてしまった。

#16 山本は#3 キャシディ選手との間隔を周回毎に拡げ、17 周目には 15 秒 394 としたが、18 周目にはスタート後、初めてその間隔が 15 秒 375 へ縮まった。チームはソフト・タイヤの消耗が進み性能低下が始まったと判断、19 周目に#16 山本をピットへ呼び、ミディアム・タイヤへの交換を行いコースへ送り返した。ピット作業は正確迅速に進み、作業時間は 11 秒 3 にとどまった。

#16 山本は見かけ上の順位が 7 番手でレースを再開した。ピット作業を終えていたグループの中ではトップを維持したままである。しかし必ずしもマシンは完調ではなかった。週末の走り出しから問題だったブレーキの左右バランスが崩れる症状が現れ始め、その影響でタイヤの内圧が変動して本来のパフォーマンスを引き出せなくなったのだ。#16 山本がピットインしている間に見かけ上のトップに立った#3 キャシディ選手はミディアム・タイヤのままハイペースで走行を続行した。

#3 キャシディ選手は 29 周目にピットイン、ソフト・タイヤを装着してコースに復帰した。#16 山本はその間に前に出たが、コースに戻った#3 キャシディ選手はさらにペースを上げて#16 山本を追いかけ始めた。見かけ上の順位は#16 山本が 4 番手、#3 キャシディ選手が 5 番手、事実上のトップ争いが始まった。

31 周目、#16 山本と#3 キャシディ選手の間隔は 6 秒 426 へ縮まった。33 周目、前を走っていた選手がピットインしたため#16 山本は先頭に立ったが 2 番手#3 キャシディ選手は周回毎に 0 秒 5 以上速いペースで間隔を縮めてくる。残り 2 周となった最終シケインで、山本はブレーキバランスの差からホイールをロックさせてしまい、間隔は一気に 1 秒を切った。

ただ#16 山本は最終ラップまでオーバーテイクシステム（OT）を使用せずに残しており勝算を持っていた。最終ラップ、#16 山本は残っていたオーバーテイクシステムを続けざまに使ってそのまま逃げ切り 0 秒 654 差で優勝のチェッカーフラッグを受けた。今季 3 勝目、シリーズ最終戦のボーナスポイント 13 点を獲得、シリーズ通算ポイントを 38 点とし、2 番手#3 キャシディ選手と 1 点差でシリーズチャンピオン獲得が決まった。#16 山本にとっては 2013 年以来 2 回目となるチャンピオンの栄誉であった。なおチームランキングでは TEAM MUGEN は惜しくも 3 位でシーズンを終えた。

■山本尚貴選手のコメント

「レース後半、ミディアム・タイヤを履いたとき『あれ？セクター１が遅いな』とは思ったんです。ブレーキの左右バランスが崩れて、遅いコーナーと速いコーナーが生じ、１周のラップタイムが上げられなくなりました。でもまさかあそこまで追い上げられるとは思っていませんでした。ただ OT を 5 発残していたし、近づかれてもよほどラップタイム差がなければダウンフォースが抜けて真後ろに近づくことはできないだろうなと思っていました。さすがに最終ラップはどきどきしましたが、2013 年以来 5 年ぶり 2 度目のチャンピオンを獲ることができ、素直に嬉しいです。この日のために開発、メカニック、エンジニア、スタッフ、みんなで力を合わせて頑張ってきました。シーズンの途中では苦しい時期もありましたが、チームの総合力とファンの皆さまのおかげでチャンピオンにたどり着くことができました。応援してくださったすべての皆さまに感謝いたします。本当にありがとうございました！」

■福住仁嶺選手のコメント

「約１ヶ月ぶりでスーパーフォーミュラをドライブさせていただきました。開幕戦で鈴鹿サーキットを走ったときは割と調子が良かったので、ある程度自信はあったんですが、ここまでツインリンクもてぎや岡山国際サーキットで良くなかったという流れもあったので正直なところ不安もありました。どこのコースへ行ってもフリー走行では調子がいい反面予選タイムアタックでうまくいかないという症状が出ていて、今回もそれが出て予選 13 位というふがいない結果に終わってしまいました。優勝を狙っていたのに表彰台すら遠くなってしまいましたが、決勝ではスタートも良かったしその後のペースも悪くありませんでした。でも自分のミスでダンロップの出口で縁石に乗ったとき急に後が出てハーフスピンしてしまい、順位を大きく落としてしまいました。それがなければポイントを獲れたと思うので残念です。スーパーフォーミュラは難しいクルマです。今シーズンは全戦出ることができずクルマ作りをうまくまとめられなかったし、自分のミスも目立ったことを反省しています」

■手塚長孝監督のコメント

「TEAM MUGEN としても HONDA としても久しぶりのタイトルがかかっていたので緊張した週末でした。金曜の占有走行から良い流れを最後まで持続出来た事が良かったです。予選もパーフェクトだったし山本選手の集中力は凄かったと感じました。レース前半は思い通りの展開でしたがブレーキの左右バランスが崩れるという問題が出た事は想定外でした。この様な状態でも冷静なドライブでタイムロスを最小限で抑えた事や、メカニックのピット作業が 11.3 秒と他チームよりも速かった事など、最後は僅差の勝利だった事を考えると、いろいろな面でタイム短縮の積み重ねが勝因でした。チームの総合力を最終戦で発揮する事が出来た事を誇りに思います。

福住はポイントを狙えるポジションで頑張っていたのですが、途中でハーフスピンして 10 秒ほど遅れてしまいました。参戦したレースでは速さの片鱗も見せてくれる時もあったので、経験を積んで強くなってくれると信じています。

シーズン途中では苦戦もありましたが、チームの総合力を発揮するために協力してくださった関係者の皆様、スポンサー様、そしてファンの皆様のおかげでチャンピオンを獲る事が出来ました。シーズンを通して応援していただき本当にありがとうございました！」

■Rankings

2018
STANDINGS DRIVER/TEAM

Po.	DRIVER	Rd.1 SUZUKA	Rd.2 AP	Rd.3 SUGO	Rd.4 FUJI	Rd.5 MOTEGI	Rd.6 OKAYAMA	Rd.7 SUZUKA	Total
1	No.16 山本尚貴 / TEAM MUGEN	11	–	10	1	2	0	14	38
2	No.3 ニック・キャシディ / KONDO RACING	2	–	8	11	6	2	8	37
3	No.1 石浦宏明 / JMS P.MU/CERUMO・INGING	5	–	0	8	11	1	0	25
4	No.19 関口雄飛 / ITOCHU ENEX TEAM IMPUL	8	–	0	3	0	6	1	18
5	No.20 平川亮 / ITOCHU ENEX TEAM IMPUL	0	1	0	5	8	3	0	17
6	No.36 中嶋一貴 / VANTELIN TEAM TOM'S	1	–	6	4	–	0	4	15
7	No.5 野尻智紀 / DOCOMO TEAM DANDELION RACING	6	–	3	0	1	2.5	0	12.5
8	No.4 山下健太 / KONDO RACING	0	–	1	0	3	1.5	6	11.5
9	No.2 国本雄資 / JMS P.MU / CERUMO・INGING	0	–	0	6	0	0.5	5	11.5
10	No.6 松下信治 / DOCOMO TEAM DANDELION RACING	0	–	0	0	5	0	2	7
11	No.18 小林可夢偉 / carrozzeria Team KCMG	0	0	3	0	–	4	0	7
12	No.8 大嶋和也 / UOMO SUNOCO TEAM LEMANS	0	–	0	2	4	0	0	6
13	No.17 塚越広大 / REAL RACING	3	0	0	0	0	0	3	6
14	No.7 トム・ディルマン / UOMO SUNOCO TEAM LEMANS	0	–	5	0	0	0	0	5
15	No.65 伊沢拓也 / TCS NAKAJIMA RACING	4	–	0	0	0	0	0	4
16	No.64 ナレイン・カーティケヤン / TCS NAKAJIMA RACING	0	–	4	0	0	0	0	4
	No.50 千代勝正 / B-Max Racing team	0	–	0	0	0	0	0	0
	No.15 福住 仁嶺 / TEAM MUGEN	0	–	–	–	0	0	0	0
	No.37 ジェームス・ロシター / VANTELIN TEAM TOM'S	0	–	0	0	0	0	0	0

2018
STANDINGS DRIVER/TEAM

Po.	TEAM	Rd.1 SUZUKA	Rd.2 AP	Rd.3 SUGO	Rd.4 FUJI	Rd.5 MOTEGI	Rd.6 OKAYAMA	Rd.7 SUZUKA	Total
1	KONDO RACING	2	0	9	10	9	3.5	14	47.5
2	JIMS P. MU/CERUMO・INGING	5	0	0	14	10	1.5	5	35.5
3	TEAM MUGEN	10	0	10	1	2	0	10	33
4	ITOCHU ENEX TEAM IMPUL	8	0	0	8	8	8	1	33
5	DOCOMO TEAM DANDELION RACING	6	0	2	0	6	2.5	2	18.5
6	VANTELIN TEAM TOM'S	1	0	6	4	0	0	4	15
7	UOMO SUNOCO TEAM LEMANS	0	0	5	2	4	0	0	11
8	TCS NAKAJIMA RACING	4	0	4	0	0	0	0	8
9	carrozzeria Team KCMG	0	0	3	0	0	4	0	7
10	REAL RACING	3	0	0	0	0	0	3	6
	B-Max Racing team	0	0	0	0	0	0	0	0

MOTUL HTFT Honda Techno Fort NGK SPARK PLUGS TOHO BOEKI www.tohoboeki.com Red Bull SANYO 3D FACOM DEWALT PINS FACTORY sparco KRS Cradle WPC Swift 999.9 ODYSSEY